

これまでの経済学・これからの経済学

佐和隆光 / 滋賀大学 名誉教授

経済学ほど批判に晒されやすい学問は類例を見ない。資本主義の運動法則の歴史的解明（歴史的法則の発見）を謳うマルクスの経済学は、科学哲学者カール・ポパーにより「非科学」のレッテルを張られ、部分工学に禁欲する新古典派経済学やケインズ経済学にポパーは「科学」のお墨付きを与えた。

私が経済学を学び始めた1960年代は高度経済成長期、理工系学部の教員や学生が大手を振って大学キャンパスを横行闊歩していた。時の文部大臣が「国立大学の文系学部を廃止すべきだ」と公言したり、大手電機メーカーの創業者が「企業経営者、政府官庁の幹部、国会議員の大半を理工系学部の出身者が占めるようになる」と語ったりもした。理工学を万能視する時代文脈に影響された私は、マルクス経済学者ではなく計量経済学者を目指すことにした。

そんな時代文脈に照らして、数学とコンピュータに頼る経済学が「これからの経済学」のように思えたからだ。以来1970年代の約半分を米国の大学で過ごすなどして、私は計量経済学者としての営みに没頭した。日本の近代経済学者の多数派にとって、市場メカニズムの効率性を前提とする新古典派経済学よりも、機械とのアナロジーがたやすいケインズ経済学の方が馴染みやすかった。しかも、有用性という観点からもケインズ経済学が好まれた。

だがしかし、1979年にマーガレット・サッチャーが英首相となり、市場万能主義（＝小さな政府）が英国の国是として掲げられるようになった。日本でも新保守主義をモットーとする中曽根康弘政権が「小さな政府」を目途とする新保守主義改革（国鉄・電電の民営化等）を断行し、小泉純一郎内閣が郵政3事業の民営化や国立大学の法人化を成し遂げ、1990年代から2010年頃まで市場を万能視する新古典派経済学が全盛を極めたのだが、新古典派の全盛期は意外なほど短かった。2008年に勃発したリーマンショックと東アジア通貨危機を契機に、自由で競争的な市場の効率性への信頼が薄れ、市場を補完する政府の役割が見直されるようになった。政治の場面でも、市場万能主義は影を潜め、グローバル化、規制緩和、民営化、小さな政府などの言葉が象徴する潮の流れは、2010年以降、徐々に逆流を開始し、国

家主義的な経済政策が幅を利かすようになった。

フリードマンやハイエクは「皆がケインジアン」の時代に「小さな政府」を推奨し、市場は万能だと一貫して主張し続けた。ところが今も昔も、日本のエコノミストの多くは、時の政権につき従い唯々諾々と言説をひるがえす。経済学者は思想信条とは無縁な「科学者」であるべきだと彼らは考える。実のところ、いかなる経済理論であれ何らかの思想信条ないし価値観に立脚している。というよりは、思想信条をあく抜きした経済理論など身もふたもない常識の羅列に過ぎない。中曽根・小泉政権下では、ほとんどの経済学者が新古典派に与した。市場万能主義を批判する言説はタブー視され、マルクスもケインズも「異端の経済学」もしくは「過去の遺物」として葬り去られた。

既述の通り、新古典派の全盛期は2010年頃を境に幕を閉じた。その後、グローバル市場の政治的分断、政府主導の経済運営、政府の肥大化など、新古典派経済学と相容れない諸施策が、だれ憚ることなく繰り広げられるようになった。かくして新古典派経済学の権威はいつの間にか失墜し、その真骨頂とも言ふべき数理経済学の魅力もまた色あせた。新古典派経済理論の業績でノーベル賞を勝ち得たジョセフ・スティグリッツが米国の所得格差批判の急先鋒に立ち、トマ・ピケティの大著『21世紀の資本』が空前のベストセラーとなり、日本ではマルクス主義者を自認する斎藤幸平の『人新世の「資本論」』が空前のベストセラーとなった。

こうした一連の現象が示唆する「これからの経済学」の姿かたちを箇条書きにして以下に記そう。第一に、国家間、個人間の所得格差は果てしなく拡大し、気候変動問題は深刻化の一途を辿りつつある。いずれも市場に委ねておいて片付く問題ではない。だからと言って、これらの問題をたちどころに解決し得るほど政府は全知全能ではない。第二に、いかなる価値規範（例えば環境保全を経済成長に優先させる）を目標とするのか、トレードオフ関係にある複数の価値（例えば効率と公正）をどうバランスさせるのかなど、思想信条をためらうことなく前提に据えるという意味で「これからの経済学」は「科学」ではなく「政治経済学」を目指さなければならない。第三に、数学や統計学の応用としての「これまでの経済学」を相対化し、哲学、思想史、歴史学などを礎とする「これからの経済学」を探索すべきである。

彦根高商から経済学部へ

ある親子二代の物語

酒井泰弘 / 滋賀大学 名誉教授

まことに不可思議なことである。由緒ある『彦根論叢』編集部から、「彦根高商100周年記念号」のために、何か一つ短いエッセイを執筆して頂きたいとの依頼が舞い込んだ。小生の家内の父、つまり義父は35万石彦根藩の武士の末裔である。小生の先祖も「士族」であるが、詳細は不明である。ところが、父親と小生とはそれに留まらず、伝統ある大学を通じて近い関係にあるのだから、一寸した驚きである。

父親の姓名は「岩佐芳次郎」と言う。その生家は芹橋地区にあり、400年間綿々と続いている。父親は明治41年生まれで、旧制の彦根中学卒業後、昭和4年に栄えある「彦根高等商業学校」を卒業した。実は、東京の慶應義塾大学からも入学許可を頂いていたのだが、祖父の勧めに従って地元の「彦根高商」の方を選択したと聞いている。「昭四会」に属する父親は「ボート部」と「弁論部」の双方に所属し、事あるごとに「琵琶湖周航の歌」を高唱した。二年若い後輩で「六陵会」の名物男・奥村一雄氏は、父親とは「刎頸の友」であり、同氏の逝去に至るまで長い交友関係を続けていた。実際、父親と奥村氏とは、高商卒業後、共に「東洋綿花株式会社」、更には「豊田通商株式会社」に永らく務めていた。

ところで、今や世界に冠たる「トヨタ」の源泉の一つは、なんと彦根芹橋地区、しかも岩佐家の隣家である「児玉家」であったのだ。「最後の大番頭」と称された「石田退三氏」は彦根芹橋の出身であり、「元祖児玉一造氏の又従兄弟」として丁重な扱いを受けた。実際、退三は児玉家の「快適な居候」として、彦根中学時代を送ることが出来た。そして、児玉一造の次男・利三郎は当時の神戸高商（後の神戸大学）に在学中、なんと豊田佐吉の婿養子となり、後の「豊田王国」を築くことになった。小生の父親・芳次郎は、子供時代からこの二人とは親しい仲であり、御互いに「退三さん」、「利三郎さん」、「よっさん」と呼び合っていた。

小生自身は商都大阪の南部の生まれであり、この段階では彦根との繋がりには全くなかった。ところが、小生は「港神戸の百万ドルの夜景」に魅せられて、丘の上の神戸大学を受験し、幸運にも現役合格したのだ。神大の六甲キャンパスでは、門脇延行氏、後藤

安正氏、林憲治氏などの俊秀が沢山おられた。門脇氏とは40年後に滋賀大学で奇跡的な再会を果たしたものの、後藤・林の両氏とは大学院在学中に永遠の別れを余儀なくされたことは、今に至るも決して忘れえない悲しい思い出である。

神戸大学の前身は滋賀大学と同じく「高商」(Higher Commercial School)であり、英訳をもじって「入ルノ困ッテラッシュアル・スクール」と揶揄されていた。小生が学生時代を過ごした60年代後半は、毎日が「安保闘争」で明け暮れた時代であり、それこそ「勉強スルノ困ッテラッシュアル・スクール」の真只中にいた。小生は幸いにも英語と数学が好きだったので、事態打開のためにアメリカ東部のロチェスター大学に留学することを決意した。そして、謹厳なマッケンジー先生の推薦を受けた小生は、その後ピッツバーグ大学にて、心優しいマエシロ先生ご夫妻の御蔭で有意義な研究生生活を満喫することが出来た。

1960年代終わりに帰国した時、小生は彦根に一時立ち寄り、神大の先輩・三辺誠夫氏と大先輩・小倉栄一郎先生を表敬訪問した。これが、後の小生の結婚と彦根在住、および滋賀大学就職への「縁結び」となったのだから、人生とは本当に予測不可能なものだ。更に、筑波大学から滋賀大学への転職に際しては、当時の宮本憲一学長、成瀬龍夫学部長、福田敏浩教授、有馬敏則教授など、多くの方々に御世話になったことを記しておきたい。

彦根高商から経済学部への長い道程—それは我が親子二代の人生行路でもある。老舗の経済学部が、異色のリスク研究科と新設のデータサイエンス学部と共に、親密に手を携えて益々発展することを祈るばかりである。

経済学部の中の三つの組織改革に関わって

北村裕明 / 滋賀大学 名誉教授

私は、1981年に経済学部助手として採用され、2023年に特任教授を退任するまで、滋賀大学で教育や研究に携われたことを幸せに思っています。同時にその間、経済学部の大きな組織改革に関わったことも、大切な思い出です。

最初に組織改革に関わったのは、1991年度発足のファイナンス学科の新設です。18歳人口の増加を受けて国立大学の定員増の動きがあり、滋賀大学では経済学部の学科新設が狙上りのぼりました。当時経済学部長であった仙田左千夫先生と美崎皓先生のもとで、私は学科設置の作業グループの責任者として設置作業に携わりました。当初、総合金融学科、政策科学科、経済法学科が検討されました。学内で議論を重ね、ファイナンス活動の国際化と総合化という社会情勢をふまえて、我が国最初のファイナンスに関する総合的で系統的な教育研究組織として、ファイナンス学科を設置することにしました。その経過と内容は、北村裕明・山崎朗・黒川晋・久保田秀樹・武永淳(1990)「現代ファイナンス学の形成」(『彦根論叢』第267号)や、北村裕明(1991)「ファイナンス学科は技術より科学教育を」(『読売新聞』1991年3月4日)を参照ください。

二つ目の組織改革への関わりは、2003年度発足の大学院経済学研究科博士後期課程「経済経営リスク専攻」の設置です。経済学部では1973年に大学院修士課程を経済学と経営学の2専攻で発足させたのですが、旧高商系の国立大学の経済学部では博士課程の設置は認められてきませんでした。横浜国立大学に社会科学系の大学院博士課程が設置され、本学でも検討が始まりました。博士課程設置の検討が本格化するのには、成瀬龍夫経済学部長の時代です。成瀬学部長のもとで、私は博士課程設置の作業グループの責任者として、構想を具体化する作業に取り組みました。文科省とのやりとりの過程で、私たちに求められているのは、旧帝大系や旧商大系の同分野の博士課程とは異なる、教育内容、教育システム、教育対象を明確にすることでした。そこで、経済経営の分野をリスクという概念で把握し直し教育システムを構築すること、個々の教員ではなく教員集団での研究指導を重視すること、主たる教

育対象を社会人とすることにしました。社会科学系では、日本で最初のリスクに関する本格的な教育研究組織の誕生です。本専攻の内容は、北村裕明・有馬敏則・阿知羅隆雄(2003)「滋賀大学大学院博士後期課程経済経営リスク専攻の新設」(『彦根論叢』第342号)を参照ください。また、経済学部創立80周年記念事業でご寄付いただいた資金で、リスク研究センターを立ち上げ、リスク研究を推進することもできました。

三つ目に関わった組織改革は、2017年度発足の「データサイエンス学部」の設置です。当時の佐和隆光学長のもとで、私は学部新設を含む大学の組織改革担当の理事・副学長として、新学部設置の検討を行ったのでした。当時国立大学全体が改革の渦中にあり、滋賀大学では新学部設置が大学の存亡に関わると認識し、作業を進めました。当初は、他大学でも設置が進められていた政策系、国際系、地域系学部の検討も行いましたが、最終的にデータサイエンス学部の設置を、2014年末に学内合意できました。その際に重要な資料となったのが、日本学術会議情報学委員会(2014)『提言・ビッグデータ時代に対応する人材の育成』でした。そして2017年に、日本で最初の本格的なデータサイエンス学部が発足いたしました。設置作業は、当時の佐和学長のリーダーシップと同時に、竹村彰通現学長と吉川英治先生の周到な申請作業への貢献が大きかったといえましょう。

ファイナンス学科、経済経営リスク専攻、データサイエンス学部ともに、当該分野における日本で最初の教育研究組織として発足させることができました。国立大学の組織新設は、国の予算を新たに必要とするだけに、社会的な需要を的確に反映したものでなければなりません。経済学部およびデータサイエンス学部における今後の組織改革でも、日本における新しい教育研究分野を切り拓く改革となることを願っています。

着任当時の経済学部とその思い出

三神憲一 / 滋賀大学 名誉教授

私が滋賀大学経済学部に採用されたのは昭和44年の4月1日でした。あれから定年迄の43年間と、その後も非常勤として10数年、合わせると何と半世紀以上経済学部と経済短期大学部にお世話になりました。それ以上に今は亡き体育の故榎本彦次先生と故山内隆先生のお二人には筆舌に尽くしがたい程、お世話になり心から感謝をしております。思い起こすとあの頃のいろいろな思い出(大学紛争、学園閉鎖、お寺での授業、転々とした教授会の場所、ラグビー部との関わり等)が錯綜して、絞れませんでした。体育との関連で課外活動の状況についてみていきます。

着任してまず驚いたのは「ここは体育大学か!」と疑いたくなる程、課外活動がとて盛んでした。おそらく学生総数の90%近くが運動系・文化系のクラブか、中には両方を兼ねて入部している者もいました。そして高校までとは違ったクラブに入っている者が多かったように思います。このような状況だったので、何といても凄まじかったのが新入生に対するクラブの勧誘です。勧誘というよりは争奪に近い感じでした。入学式前・後の彦根駅は各クラブの勧誘合戦場となります。改札口から出てくる新入生に対して、各クラブの部員が我先に駆け寄り、名前と出身校を訊く。それが同じ母校ともなると、2人の部員がその学生の両脇に手を入れ、有無を言わず、そのまま拉致して部室まで連れていく。この時点でほとんどの場合、入部させられる。寮に入った学生には毎晩のように勧誘が続く。体格的に優れ、運動能力の高そうな新入生に対しては、まず各クラブ間で争いになり、有利な方が勧誘する。新入生が通学の場合、自宅まで行き、両親と本人を粘り強く口説いていく。また、あるクラブの者は米原か近江八幡駅から先に汽車に乗り、新入生を捜し、強引に勧誘していく。たしかにこのようなきわめて荒っぽく、強引で、ある部分人権を無視した方法は、現在ならば九分九厘、警察のお世話になると思います。しかし、この頃は、近隣の国立大学においても類似した勧誘方法を用いていたのも事実です。ある意味では許容範囲だったのかも知れません。健気なのは入部した新入生に対して、下宿の世話から家庭教師の斡旋、貧しい生活費を削って

まで食事に連れていっていました。当時の学生気質の一端を垣間見ることも出来ました。

運動クラブに関してはまず、全体的にクラブ数の多さに驚きました。しかし、施設面、経済面、いずれにおいても貧弱で恵まれている状態ではなかったと思います。多くのクラブはクラブバイトやOB会の援助を受け必要な物品を購入していました。それにも拘わらず、各クラブは練習時間帯を調整し、譲り合い、協力して厳しい練習を積んでいたと思います。そんな中でもボート部とヨット部は部員数も非常に多く、戦績においても全国レベルだったので頭一つ抜き出していたと思います。ヨット部の中には「どうしても世界選手権に出場する」という強い意志があり、故意に1年留年して、無事、その目的を達成した猛者もいました。

文化クラブに関しては、グリークラブの印象が強く残っています。入学式や卒業式にはその存在感を遺憾なく発揮するだけではなく、文化系クラブの中では一番部員も多かったし、講堂でよく練習をしていました。現在のクラブ全体を眺めると、残念ながら現役部員とOBとの関係はあまりにも希薄になってきていると感じています。

そして、講堂の前で風雪に耐え、大正・昭和・平成・令和と長きにわたり滋賀大学の歴史の経緯を優しく見守り続けてきた銀杏の大木がいつの間にか消えてしまっていました。残念というか、少しばかり憤りを感じているのは私だけでしょうか?あの頃の経済学部には、とてパワーのある若手教官(研究だけでなく、スポーツ活動、例えば昼休みの対事務官とのソフトボール試合、ボウリング大会、更にはスキー実習への積極的な参加等)が多数いらっしゃいましたし、何をしてもとても大らかで、ゆっくりと時間が流れていたように思います。

近江商人経営論開講の今昔

宇佐美英機 / 滋賀大学 名誉教授

滋賀大学経済学部で近江商人について論じることは、ある意味で大学のアイデンティティ、あるいは建学の精神に関わることなのかも知れない。そう感じていた私は、平成6(1994)年11月、本学に着任して最初の教授会で、「微力ではありますが、近江商人研究の学統を継ぐ」旨の挨拶をしたものである。

しかし、滋賀大学に奉職する以前の私は日本商業史の研究者であると意識しながらも、分析対象は債権・債務関係の解消の実態を明らかにすることに関心があり、近世京都における町奉行所の裁許規定や町方での金銀係争の事例分析がほとんどで、近江商人を取り上げたことはなかった。それゆえ、11月1日付けで着任したこともあり、学年暦年度内にはまったく授業負担の義務がなかったのも、翌年から担当する日本経営史の講義ノート作りに励めばよかった。

そこで、彦根高商開校以来、近江商人について論及している論文や書籍を片っ端から読むことにした。もちろん、幾つかの文献については既読していたものもあったが、時系列で読み進めてみた。そうすると、菅野和太郎・宮本又次・江頭恒治・小倉榮一郎・高橋久一・原田敏丸・水原正亨・上村雅洋・瀬岡誠・小川功氏など、彦根高商や戦後の経済学部で教鞭をとられた諸先生方が近江商人を取り上げられていた。これらの諸先生は、専門的な分野は少しずつ異なるものの、広義では商業史・経営史・経済史の講義を担当されている。

一方、彦根高商が発足してまもなく彦根高等商業学校商業及経済研究会や同調査課が組織され、『パンフレット』や『調査研究』などの雑誌が発行されるようになるが、その中には田中秀作(経済地理)、太刀川利男(経済原論)、芳谷有道(商業算術・商業学)、松本雅男(原価計算・簿記・工業経営)など、専門分野が歴史とは異なる教員も近江商人や近江の商工業について論稿を執筆しており、また近江蚊帳について2名の学生も寄稿していた。

近江商人を学術研究の対象として取り上げ、史実の解明に努めた最大の貢献者は菅野和太郎・宮本又次氏であることは疑いないが、彦根高商開校直後には商業史を専門としない異なる関心から、分析視

角を変えて近江商人研究を行った教員がいたことは記憶に留めるべきことであろう。

とはいえ、これらの諸先生方が講義のなかで、どのような近江商人の話をされたのかは不明である。研究成果は著書や論文で確認できるものの、授業でどのように反映・還元されたのかはわからない。そもそも近江商人を冠した講義科目はなかったようである。私は日本経営史担当教員として採用されたが、当時の講義は通年科目であり、近江商人に関わった話はせいぜい2コマ位しか時間配分でできなかった。おそらく開校・開学以来、主として商業史・経済史・経営史の講義科目を担当された諸先生も同様な対応をされていたものと思われる。

開校以来、商人・商業の歴史を授業することに教育の意義を見出していたことを勘案すると、学術研究を深めることは当然だとしても、その成果を学生たちに授業を通じて還元することが教員の務めではないかと、着任以来ずっと考えてきた。そこで、平成11年度から Semester 制を導入し講義科目を再編・変更することになったのをきっかけに、日本経営史は半期で概説を講義し、別の半期は「近江商人経営論」として授業したいと希望し、幸い教授会でも了承されたのである。

「近江商人経営論」は、したがって、私の個人的な希望で開講されたこともあり、退職するまで一人で担当してきた。授業内容が学生諸君に十分な満足を与えたかどうかについては心許ないが、私は新しい成果を毎年つけ加えるために研究を重ね、成果を授業に取り入れられたので十分に楽しむことができた。

一方で専門科目でなく多様な観点から近江商人を語る、教養科目としての「近江商人論」があると良いとも思っていた。彦根高商開校当初の諸先生方が、各自の関心から近江商人を取り上げていたことを想起するならば、改めて歴史学とは専門が異なる先生方も近江商人・近江商人企業の研究に取り組み、彦根キャンパスに新しい近江商人研究の学燈が点されることを期待している。

社会システム学科設立の頃

金子孝吉 / 滋賀大学 名誉教授

私が滋賀大学経済学部へ赴任したのは、平成元年のことである。それから2年ほど経ち、新しい教育・研究環境に私がよくやく慣れ始めた頃、経済学部を大きく改革するという話が出てきた（そのとき学部にはファイナンス学科が設置された〔平成3年10月〕ばかりだったが）。平成3年施行の大学設置基準の大綱化を受けて、本学の経済学部も、全学制的な改組を行うことになったのである。すでに他大学（たとえば京都大、神戸大、和歌山大等）でも、大綱化の導入により同様の大学改革・学部再編成が進みつつあった。私は当時まだほんの若手ではあったが、どういわけか学部改革・学科新設のワーキング・グループの一員に加えられた。そして、それから暫くの間、学部改組のための作業——若いので下働きの仕事が多かったが——に多大な時間とエネルギーを割くことになった。

経済学部の改組は、昭和28年創設の経済短期大学部を廃止転換し、一般教育担当教員を専門学科に所属させ、5学科であった学科体制を、新学科を含めて6学科に大幅に再編成し、21世紀のグローバル時代に相応しい新経済学部を設立するというコンセプトのもとに行われることになった。学部内では、こうした大規模な学部再編プランについて賛否両論があり、熱い議論が続いた。新しく設立する学科の名称も、産業文化学科、総合社会システム学科など様々な案が出されたと記憶している。

それでも、平成4年度に入った頃には概算要求書ができあがるくらいに学部改革作業は進捗した。そこに至るまでの過程で、ワーキングの一員だった私が最も苦心して取り組んだのは、新しく作られる学科の4講座の1つである国際文化システム講座の教育理念の設定、また講座で開講される授業科目の策定、そしてそれらの担当を各教員に相談・依頼する仕事だった。同僚教員のなかには、新たな授業科目を担当することに少々慎重な姿勢を示す方もいた。しかし、何度も研究室を訪ね、話し合いを重ねていくうちに、次第に新科目担当に前向きになってくださるようになり、また、その話し合いを通じて、新任教員にまだ近かった私は、他の教員の方たちとずいぶん親しくなれたような気がしている。

さて、新学科の名称は、最終的に「社会システム学科」になったのであるが、この学科名は当時としてはレアなものであった。新学科は、社会システム講座、法システム講座、思考情報システム講座、国際文化システム講座の4つから成り立っていたが、この4部構成が、最初からそうなることを目指していたわけではなかったものの、所属予定の教員の専門分野に基づいて4つのグループを編成していくと、結果的に、20世紀半ばに「社会システム論」を打ち立てたアメリカの社会学者タルコット・パーソンズの〈AGIL図式〉とよく類似していた。それが、「社会システム学科」という名称になった大きな決め手になったようである。そして、その当時としては斬新な学科名称は、それ以降、いくつかの大学で学科名や専攻名として使われるようになった。つまり、本学部の社会システム学科はそれらの本家本元であるといっていようだろう。

また、新学科が誕生した平成5年の前後の時期、それを記念し、同時に新学科を広報する目的で、社会システム学科新設公開シンポジウムや社会システム論に関連する様々な講演会が学内で陸続と開催され——吉田民人氏のシステム論関連講演、中野秀一郎氏のパーソンズについての講演、長岡克行氏によるルーマン講演会等——、新学科を盛り上げていくとする活動が盛んだったことが思い出される。

新学科設立後の受験生の動向については当初心配もされたが、それは杞憂に終わり、高校生や高校の進路指導の先生方からは新学科開設を歓迎する旨の声が多く寄せられた。その後も6番目の学科への志願者数は確保され続けたことから、経済学・経営学をしっかり学びながら、それらとの関連領域の学問分野も幅広く学ぶという社会システム学科の教育理念は、学科が募集のターゲットとしていた受験生たちには、総じて共感をもって受け入れられてきたのではないかと思う。

大学教育における「簿記論」とは

太田善之 / 滋賀大学 経済学部 教授

世の中の人々は、資格を取りたい人(資格に頼りたい人)と資格などいらなと思っています(資格など念頭がない人)の二つに分かれると思います。どちらかと言えば私は前者の部類に入り、資格を意識したのは大学入学前後でした。弁護士になろうと思ったこともあり司法試験、そして法学部が頭をよぎりましたが、大学入試の時にはさらに経済学部系も含めて国立大学、私立大学と受験しました。結局、経済学部を選択して入学したわけですが、普通高校を卒業した私が「？」と思った授業に、実は簿記がありました。経済学部に入學した私は指定された教科書(写真は私が使っていた現物です。)を携えて受講し、演習問題を解かされるわけですが、よくわかりませんでした。そもそも教科書の内容には最初から『シェアの等式』や『勘定学説』の言葉や説明もあり、ちんぷんかんぷん。その後すぐに演習問題の資本を計算する問題を解かされた際もあてられないように、首をすくめてうつむき気味にして先生が通り過ぎるのを待っていた気がします。この教科書に書かれていたことをようやく理解できるようになるのは、シュマーレンバッハの研究をなされている齊藤隆夫先生(名古屋大学名誉教授)がご担当する財務会計を勉強するゼミに入り、自分自身がドイツ会計学を中心に研究するために、その種の書物を読むようになってからです。今考えれば、当時はとくに自分自身が研究した内容をそのまま教え込むために、それらを盛り込んだ教科書を使うこともよくありましたから、この教科書も先生(著者名から気づかれたでしょうか。著者は本学可見島達夫先生のお父様です。)のそうした成果の一つであったと思います。

しかし、当時の私はこのままでは単位すら怪しいと思い、また、簿記は将来何かの役に立つ資格だからと思い、慌てて専門学校に入りました。資格取得のための学校ですから、教科書も検定試験向けに内容も絞られていたため、自分には分かりやすかったです。そして、専門学校での授業を中心に簿記を勉強して3級、2級、1級と資格を取得することになります。もちろん、大学の「簿記」も単位を修得することができました。

最近の滋賀大学における「簿記会計」の講義では、

滝澤ななみ著『みんなが欲しかった簿記の教科書』(TAC出版)を継続して使っていることは、ご存じの通りです。会計情報学科を前提にして簿記や会計という積み上げ科目の学習体系を考えれば、初心者に対して資格取得も意識させつつ、専門学校が出版するこの本を教科書にして「簿記会計」を理解してもらう意味もあると思います。その後、「会計学基礎」において理論等の基礎を固め、次の「財務会計総論」や「管理会計総論」につなげるということが本書採用の理由の一つでしょう。

ただ、これ以前のコア科目時代(「簿記会計A」、「簿記会計B」を開講し、それらに組み合わせでコアセッションを実施)では、赤塚先生や可見島先生などが中心になって執筆された経済学部独自の教科書を用意し講義を行い、その後TAやSAが教壇に立ち、演習問題を解くという流れで教えていました。この自前の教科書もよくできていたと思います。これは、経済学部が誇る簿記に強い先生が編集しパワーポイントのスライドで構成された教科書で、管理会計の初歩までを含んでいました。そして、コアセッションのための授業計画も綿密に作成し、TAやSAに行わせる内容も体系化されていました。私も数年、この本を使って講義しましたが、一つのプログラムとして十分に機能したと思います。

少し例をあげましたが、私はそれぞれの教科書にもとづいて大学の講義や専門学校の授業で簿記を学び、また大学で簿記を教えてきました。恐らくは教育目的に応じて教科書を選んで学び、教えることが正解に近いのかもしれませんが、しかしそれでも、まもなく退職する私にとって、使うべき教科書の選択を含めて大学教育で教える簿記(論)とは、あるいは、大学で受けた(受けるべき)簿記教育とはどうあるべきかという問題は、結局なかなか解決が難しいことがわかった教員生活でした。



可見島俊雄『簿記学概論』(改訂版)、不二印刷工業株式会社、昭和52年。

滋賀大学経済学部で学んだこと 1983-87年

御崎加代子 / 滋賀大学 経済学部 教授

私が滋賀大経済学部に入學したのは、1983年4月である。1983年は、マルクス没後100年、シュンペーターおよびケインズ生誕100年にあたり、生協の書籍コーナーには、その関連文献が平積みされていたことを記憶している。

このような記念すべき年に経済学部に入學したのであるが、当時の私は人生のどん底に落ちたような気分だった。滋賀大経済学部への入學は、私にとって全く想定外の出来事だったからである。私は大阪府立大手前高校に入學したときから多くの同級生たちと同様、京都大学への入學を目指していた。しかも経済学部ではなく文学部でフランス文学を学ぶことを希望していたのである。数年前に共通一次試験制度が始まり、当時、国立大学の受験は一度しか許されていなかった。その中で「2次募集」という制度で、第一志望の国立大を落ちた受験生を共通一次の点数だけで選考し、入學させていたのが滋賀大経済学部だった。京大受験に失敗した私は、この制度により滋賀大に入學したのである。

入學当時、私の周りには、京大や阪大、他の国立医大を落ちてきた「二次募集」組がたくさんいたが、その多くが大学受験に再挑戦するために途中で退學した。しかしながらすでに浪人をしていた私には、滋賀大で頑張るという選択肢しか残されていなかった。私は、4年後に大学院に進學して研究者を目指すことにした。この時点で経済学の研究者になることは考えていなかったのも、語学を中心とした勉強に没頭することを固く決意した。部活にも所属せず、友人もほとんど作らず、勉強と大阪でのアルバイトに勤しむ私を、当時の同級生たちは変人と思っていたに違いない。

このように私の滋賀大生活は暗澹たるものだったが、今から振り返れば、今の私を創った貴重な出会いと学びがあった。まず1・2回生配当の第二外国語は迷うことなくフランス語を選択した。担当は吉田洋一先生だった。先生のフランス語の授業は大変難しく、試験の合格率も非常に低いことで有名だった。先生の厳格な文法指導と文学作品の読解指導は、経済学部の第二外国語のレベルをはるかに超えていたと思うが、もともとフランス語が勉強したかった

私にとって、これは願ってもないチャンスだった。現在、フランス語を駆使して研究活動を行うことができているのは、この時の吉田先生の厳しい指導のおかげである。

また経済学に関していえば、1回生向けの教養科目「経済学」を担当していた、若き佐伯啓思先生の授業が忘れられない。教養科目というカテゴリーだが、先生の授業の内容は、他の専門科目の何倍もの価値があったと思う。私はこの授業で、経済学の基礎理論、経済社会学、社会思想史その他を学ぶことができた。4回生の時には、先生の担当されたフランス現代思想の授業も受講することができた。先生の最初の御著書『隠された思考-市場経済のメタフィジクス』（筑摩書房）は、私が3回生だった1985年に公刊された。生協食堂に有志が集まって、ささやかな出版パーティをしたことを記憶している。

また同じ1985年に公刊された越後和典先生の御著書『競争と独占-産業組織論批判-』（ミネルヴァ書房）からも大きな影響を受けた。この本は越後先生担当の授業「産業組織論」のテキストだった。不覚にも私はこの授業に出席しておらず、試験対策としてこの本を読んだのであるが、読み始めると面白くて止まらなかった。先生はカーズナーをはじめとする新オーストリア学派の経済学をいち早く日本に紹介したことで知られる。この本で、先生はご自分の過去の研究業績をきっぱりと否定し、それに代わる新しい理論体系を示されたのである。（ヒックスが、輝かしい理論経済学の功績を捨てて経済史の研究に転向したように・・・！）私の生涯の研究テーマとなるワルラスに出会ったのは、松嶋敦茂先生のフランス語外書講読の授業だったが、この新オーストリア学派との出会いも、私の将来の研究の方向を決定づけるものであった。

このような出会いと学びがあり、私は結局、文学ではなく経済学の研究者を目指すことを決意し、1987年4月に一橋大学大学院経済学研究科に進學した。奇しくも彦根高商から東京商大という伝統的な進學ルートをとだるることになったのである。

滋賀大学とともに

未来に繋ぐ百周年を迎えて想うこと

澤木聖子 / 滋賀大学 経済学部 教授

滋賀大学に奉職して今年で26年になります。生を受ける場所も時代も自分では選べません。滋賀大学の百周年の慶賀の時を現任教員として迎えられましたことは、私の人生の中でも奇跡の一つだと感じています。幸せに感謝しながら、徒然に想いますことを記させて頂きます。

初めて滋賀大学を訪れたのは、1997年10月の穏やかな陽ざしに包まれた午後でした。当時、名古屋大学で日本学術振興会特別研究員PDの身分で大学職の公募に応募し続けていた私は、滋賀大学で採用のための面接を受けることを許され、緊張しながら名古屋から新幹線で米原に向かいました。米原駅のホームに設置されている自動販売機の飲料が冬仕様のホット缶であり、待機している車内に暖房がかかっていたことに軽いカルチャーショックを受けたことを今でも鮮明に思い出します。湖北に位置する彦根は、桜花の春、深緑の夏、紅葉の秋、白雪の冬と豊かな自然の景観に恵まれ、大学が位置する品格ある城郭の佇まいが私は大好きです。この地で、私は多くの人々との邂逅を経験することになります。地域社会の人々、教職員、学生にも恵まれました。以下、滋賀大学の100年の中で、私が時を重ねた4分の1の時間、変わりゆくこと、変わらないことについて考えてみたいと思います。

私が滋賀大学に着任した頃は、大学のご近所にも銭湯がありました。研究室で徹夜で仕事をする火曜日の夜には必ず通いました。番台のご主人や地元の人々と何気ない会話を交わす中で、自分も彦根の風土を肌身で感じるようになっていたように思います。北野神社のお向かいには、たこ焼きやさんがあり、よく寄りました。化粧品雑貨を扱うお店や食堂のご夫婦、城町にはよそ者の私を支えて下さる地元の方々のご親切がありました。お店は閉じられご近所の景色は変わりましたが、今でも変わらぬ交流を頂くことができています。

滋賀大学に赴任してまず印象的でありましたことは、事務職員の方々が遅くまで仕事に取り組まれている様子でした。教員という立場でお世話になることで、院生時代とは違う視点で気づくことも増えました。事務職員の皆様の仕事内容の多さや難しさを少

しずつ知るにつけ、国立大学の運営の仕組みや膨大な仕事量にご対応される職員の皆さまには常に感謝の気持ちを持ち続けています。できるだけご迷惑をおかけしないようにと思いつつながら、この点は今も変わりません。

また、学界だけではなく社会でも著名な先人の諸先生の薫陶を受けることもでき、多くの先輩教員や優秀な若い同僚にも恵まれてきました。着任した時からこの思いは変わりません。自分が滋賀大学にご縁を頂けたことは過分なことであると常に自戒しています。

このような心許ない私が、滋賀大学で仕事を続けることができたのは、やはり学生たちとの出逢いにあると思います。常に20代の若い学生と接する中で、自身がいつの間にか学生たちの親御さんの年齢を超えても、着任時と変わらない心身で正対してきました。しかし、確実に学生と自分との間の世代間ギャップが生じてきているためか、ここ数年は、学生の価値観や意識の変化に戸惑うことも増えてきました。今日の若者に向けてコミュニケーションの仕方をアップデートすることの必要性を日々痛感しています。とりわけ、2020年度から直面した新型コロナウイルスによるリモート・ワークの本格導入は、学生にも教職員にも、そして社会や世界全体にも、学ぶことや働くことに対する価値観を大きく一変させました。キャンパスライフを謳歌することができなくなった学生を気の毒にも思いましたが、教員が工夫することで、いつの時代も若い学生の無限の能力を発見し、引き出すこともできるのではと思いつつ直しています。当世の学生のデジタルに強い特性を活かすことで、新たな時代に向けた学びを発展させることができる環境を、ここ滋賀大学は備えています。

他方、最近では卒業生達が声をかけてくれる機会も増え、卒業生を送り出せるこの仕事の素晴らしさ、有難さを実感する毎日です。20歳代から40歳代にまで継承されているゼミ生の経糸・緯糸に育まれながら私は生きています。百周年を心からお祝いし、滋賀大学、陵水会のみなさまの久遠のご発展をご祈念申し上げます。

中井源左衛門家文書のこれまでとこれから

青柳周一 / 滋賀大学 経済学部 教授

私が経済学部附属史料館の専任教員として着任したのは、2001年6月のことである。東京で生まれ、宮城県仙台市で大学生・大学院生生活を過ごした私にとって、滋賀も彦根も過去に一度旅行で訪れたことがある以外は、全く見ず知らずの土地であった。

当時の史料館では、経済学部の宇佐美英機先生（現本学名誉教授）と、私の前任者である史料館専任教員の岩崎奈緒子先生（現京都大学総合博物館教授）を中心に、科学研究費補助金による中井源左衛門家文書の調査・整理事業が進められていた。

近江国蒲生郡日野（滋賀県蒲生郡日野町）の中井源左衛門家は、江戸時代の近江商人としては最大級の商家であった。中井家文書は史料館で収蔵する近江商人関連史料の中にあって最も著名なものの一つであり、現時点で史料館のHPなどで公表している総点数は2万点以上に及ぶ。

そして、中井家文書を研究する者にとって最重要の文献となるのが、江頭恒治氏の『近江商人中井家の研究』（雄山閣、1965年）である。経済学部の母体となる彦根高等商業学校、そして新制滋賀大学で教鞭を取り、史料館の初代館長も務めた江頭氏（こうした事実も、着任後しばらくしてから知った）は、同書によって日本学士院賞を受賞している。着任にともなう手続きのため滋賀大を訪れた際、宇佐美先生から「これを読んでおくように」と、この1000頁を越す大著を手渡された私は、近江商人の「お」の字も分らないまま、しばらく持ち歩いて少しずつ頁をめくることにした。今でも同書は座右にあるが、持ったときの重さとともに当時のことを思い出す。

同書を読んですぐ気づいたのは、中井家にとって経営上の主力となる店舗が仙台に置かれていたことであった。中井家は仙台城下の有力商人であり、幕末には仙台藩の蔵元（年貢米や産物の販売・輸送などを取り仕切る役職）も務めたのだが、大学院当時の私は江戸時代の富士山旅行と登山の歴史を専門に研究しており、仙台で暮らしているながらそのことを認識していなかった。不勉強を恥じるほかない。

さらに中井家の出店は仙台以外にも、石巻（宮城県石巻市）や天童（山形県天童市）といった南東北地方の各所に展開しており、それらは自分にとって土

地勘のある場所だった。

着任してすぐ中井家文書の整理作業に加わった私は、「仙台支店長」といった呼び名を頂戴することになった。近江商人の知識には乏しいものの、ともかく史料中にくずし字で記された仙台藩に関する単語や、東北地方の地名などは読解できたからである。

2003年3月、科研費の報告書として中井家文書の目録が刊行された。その後史料館では、科研費を活用した大型文書群の調査と整理を継続していくこととなる。

中井家文書は全点附属史料館で閲覧に供しており、さらに現在は史料館のHP上で、収蔵史料目録検索システムによる全点検索が可能となっている。冊子目録よりはるかに容易に閲覧したい文書を見つけられるようになり、研究や教育上での利便性が格段に向上した。

史料館にも、また自分自身の研究と教育にとっても、中井家文書は欠かすことのできない存在である。たとえば史料館では毎年秋に企画展を開催しているが、2004年度の「近江商人 中井源左衛門—新収史料を中心に—」をはじめとして、2009年度「近江商人を学ぶ—中井源左衛門家—」、2016年度「東日本大震災5年 近江商人とみちのく」などにおいて、中井家文書を大きく取り上げてきた。

近年では2021年度「近江から見る流行病と近江の薬」で、幕末の中井家当主の日記や奉公人による書状などから、当時のコレラや麻疹の流行状況について記されたものを展示した。また中井家文書中には薬の行商に関する史料もあり、それらもあわせて取り上げた。この企画展の目的は、コロナ禍の最中において感染症および製薬・売薬の歴史を振り返ることであったが、こうした現代的な問題関心に基づく研究にとっても中井家文書は有用であることを示せたように思う。

私が担当した授業でも、2022年の「近江商人論」や今年の「地域社会・文化論」ほか、これまで何度も中井家文書を取り上げてきた。その論じ方は授業ごとの目的や目標はもとより、その時々自分自身の問題関心や社会状況にあわせて変化している。経済学部が新たな100年を迎えるこれ以降も、中井家文書は多くの研究者によって、これまでになかった視角から論じられ、その都度新たな生命を吹き込まれていくことになるだろう。及ばずながら、引き続きその一端を担っていきたい。

滋賀大学経済学部との不思議な縁

小野善生 / 滋賀大学 経済学部 教授

人生の節目における縁

人には、多かれ少なかれ、これまでの生活が大きく変化するような人生の節目が幾度か訪れるものである。それぞれの節目において人は、あれこれ悩んで1つの決断を下し新たな段階へ進んでいく。ただ、節目においては、不思議な出会いや出来事によって、何かに導かれるように道が開けていくことがある。このような偶然の出会いや出来事のことを、縁というのだろう。滋賀大学経済学部と私は、そういう意味では大変縁が深い。

一発逆転で滋賀大学経済学部に入學

私の大學受験は、失敗が続き、浪人を覚悟する状況にあった。滋賀大学経済学部を受験したけれども、半ばあきらめていた。合格発表の日、ダメもとで掲示板(今や見られなくなった光景であるか)を見に行ったところ、受験番号(私の記憶が確かならば317番)があった。当時、滋賀大学経済学部の前期試験は、総合問題という英語と小論文が合わさった独自の形式であり、センター試験のスコアがあまり高くなかった私は、この試験のスタイルならば巻き返せるかもしれないと考えた。そこで、一発逆転をかけて、多くの受験生が回答するような内容とは差別化した、独自性のある回答をした。この戦略が功を奏して、合格することができたと思う。採点担当が誰であったのかは全くわからないが、その先生方のおかげで今があるといっても過言ではない。そういう意味では、採点者と縁があったということだろう。

滋賀大学経済学部の人脈によって実現した初めてのフィールド調査

神戸大学大学院に進学し、修士課程そして博士課程とステップアップしていったものの、博士課程修了そして学位取得のためには、どうしてもフィールド調査を実施する必要がある。しかし、調査に協力してもらえる企業の伝手がなく困っていた。そこへ、社会人大学院生で同じ滋賀大学経済学部出身ということで懇意にしていた山縣康浩さんが、フィールド調査実現に向けて尽力してくださった。その結果、博士論文につながる研究成果につなげることができた。

ここでも滋賀大学経済学部との縁によって、道がひらけたのである。

就職で救いの手が差し伸べられる

後期課程の修了および学位の取得へ見通しがたった頃、教員の公募に悉く落選し、就職先が決まらなかった。そこへ、滋賀大学経済学部から経営管理論を担当できる教員を探しているという話が舞い込んで、チャレンジできることになった。そして、運よく採用されることになったのである。教員のポストが得られず、オーバードクターがほぼ確定した状況で、滋賀大学経済学部が救いの手を差し伸べてくれたのである。これは、大学受験で苦戦して浪人ほぼ確定の状況にあって一発逆転で滋賀大学経済学部に入學できた展開と驚くほど似ていて、大変不思議なものを感じた。

滋賀大学経済学部との不思議な巡り合わせ

これらの出来事以外にも、滋賀大学経済学部の大先輩から多大な御恩を賜った。勉強会を通じて桂泰三さんからは様々な薫陶を受け、堀川馨さんからは公私にわたる様々な支援をいただき、不振にあえいでいるときに藤本幸延さんに熱い激励をもらい、調査研究において力石仲夫さんからいろいろサポートしていただいた。また、同じ経営学の研究者の世界においても、伊藤博之先生や西尾久美子先生をはじめとする滋賀大学経済学部の同窓生のつながりから様々な恩恵を受けてきた。文字数の都合でお名前を挙げるができないのが心苦しいが、ここに挙げた同窓生以外の方々、滋賀大学経済学部にゆかりのある様々な人々から、多くのバックアップをいただいていた。

今こうして滋賀大学経済学部とのつながりを振り返りながらエッセイを書き進める中で、改めて滋賀大学経済学部、そこにゆかりのある人々との深い縁によって今の自分があるということを強く認識した。そして、何をおいても、滋賀大学経済学部に心より感謝を申し上げたい。

技術進歩と教育：生成系AI

松下京平 / 滋賀大学 経済学部 教授

百周年記念企画としてのエッセイにどのような内容の原稿にしようものかと色々悩んだ結果、世間でもっぱら噂になっている生成系AIについて書くことにした。というのも、各大学から生成系AI利用に関する基本方針が打ち出される昨今の状況下で、私自身は生成系AI未利用者で、その長所・短所をそもそも理解できていないからである。この場をお借りして、生成系AIを実際に使ってみることで、その使用感を確かめるとともに、教育的観点から学生たちに何が伝えられるかについて思いつくところを書いてみようと思う。

まずは、生成系AIに尋ねる質問内容を考えることから始める。真っ先に思いついたのが、私は本学部に就職して今年で14年目になるが、彦根について自分があまりにも不勉強ということである。そこで、生成系AI（今回はChatGPT）に「彦根の魅力を教えて」と尋ねてみた（2023年6月15日現在）。すると、幾つかの回答が瞬時に提示された。まず、長閑な琵琶湖湖畔、現存天守の一つ彦根城、そして少し足をのばせば百名山で名高い伊吹山という素晴らしい文化・歴史・自然があるとのこと。

そんなことは当方でも知っているのですが、さらに「もう少し詳しく教えて」と食い下がってみた。すると、琵琶湖周辺の信仰の中心地である近江神宮、伝統工芸としての琵琶湖大津絵、そして彦根祇園祭なる伝統行事がある、とのこと。なるほどちゃんとあるではないかと一瞬思いかけたが、近江神宮や大津絵は彦根のものではないことに気づいた。そうであれば、一緒に紹介されている彦根祇園祭も本当に存在するのか疑わしい気がしてきた。しつこいようであるが、今一度、ChatGPTに「彦根祇園祭は本当に実在するのか？」と尋ねると、「彦根祇園祭は、滋賀県彦根市で開催される祭りです。しかし、私の知識は2021年までのものなので、それ以降は彦根市の公式ウェブサイトを確認」するようにとのことである。早速、彦根市のHPで「彦根祇園祭or 祇園祭」の足跡がないか調べるも、一致する結果は見つけられない。

そこで、今度はgoogleで「彦根祇園祭」を検索してみた。すると、トップで引っかかったのは、観光庁による外国人観光客の誘致政策に関する記事（朝日

新聞デジタル:2023年3月31日現在）で、そこでは「日本でしか味わえない体験で外国人観光客を呼び込もうという取り組みが始まる。京都の祇園祭に曳（ひ）き手として参加したり、彦根城を借り切って大名気分を味わったりと、これまで味わえなかったような体験が打ち出される…」と紹介されていた。他には、某旅行会社のHP上で京都の祇園祭と彦根城を楽しむツアーが紹介されていた。どうやら、ChatGPTはそれら情報を独自に結合し、彦根祇園祭なるものを生み出したのではなかろうかという結論に至った（私が浅学なだけで彦根祇園祭は実在している／いたかもしれない。その時は何卒ご寛恕を）。

生成系AIに要求度の高い依頼をした場合、一生懸命返答しようとする姿勢は評価するものの（取っ掛りにくい課題を出したときに、学生が諦めずにこういった姿勢で取り組んでくれると教員の立場としてはとても嬉しく思う）、出力された結果には少々注意が必要そうである。今回は、幸いにも、一瞥して返答内容が疑わしいと気づけたが、たとえばより不慣れた研究領域で生成系AIに相談した場合、自分自身が返答内容の違和感に気づけるかは甚だ疑わしい。

インターネットという巨大情報網から私たちが求める情報を瞬時に抽出する生成系AIは賢く使うとタイムパフォーマンス（いわゆるタイパ）全盛期の現代社会において有能なツールであることは確かである。生成系AIで実行可能な領域が今後飛躍的に拡大することは容易に想像できるため、個人的には積極的に活用していきたいと考えている。しかし、重要なことは、情報の真偽の判断や情報の解釈については結局のところ自分自身の責任の範疇で行わなければならない、それには相応の能力と時間が必要となる点である。タイパ重視の学生たちにとっては本末転倒な内容かもしれないが、ゼミや授業ではこの点を強調して伝えて行きたいと思う次第である。

経済学部における国際法科目

坂田雅夫 / 滋賀大学 経済学部 教授

日経新聞を見てみましょう。「金融機関、5割がサステナ人材不足」(2023/6/22)、「三菱UFJフィナンシャル・グループ(FG)は7月から融資先のサプライチェーン(供給網)に児童労働や強制労働などがなければ詳細に調べる」(2023/6/28)、そのほか、ESG投資、人権デュー・ディリジェンス、というようにカタカナ語があふれています。

もの、人、情報が国境を越えて、素早く移動する今日、あらゆる問題への対処が、世界である程度足並みをそろえる必要が生じています。そのため、いろいろな問題について、国際的な場において対象方針が話し合われています。そこでは、問題の認識枠組み、対処方針、具体的なやり方(規則やガイドラインといったもの)が世界規模で作成されていくのです。世界でできたことが、各国の国内法や、業界のガイドラインへと導入されていくのですが、そこで特有の意味を持つ単語を下手に日本語に訳してしまうと、さっぱり意味が分からなくなることがあります。そこで便利なカタカナ語が氾濫する時代になってしまったのです。

さて改めまして、経済学部で国際経済法、環境法、国際法を主に担当している坂田といいます。私の専門とする国際法にはある種の偏見が根強く残っています。国際法は国と国の関係を定めた法で、それに仕事として関係するのは政治家や中央省庁に勤める官僚だけで、庶民や民間企業には関係ないというものです。しかしながら、このイメージはかなり古いものです。上述の新聞記事のように、今日では、様々な場面で国際的な動きが、各種民間企業や我々庶民に影響し、また逆に民間企業や我々個人の動きが国際規範を動かしてもいます。

民間企業の活動に、国際的な動きが具体的にどの様に関わっているのか、大変多くの事例があるのですが、せっかくだから上述の単語をもう少し説明してみましょう。サステナブル(またはサステナ)という単語は、直訳すると持続可能となります。この言葉は環境保護の中心的な単語となっています。特に最近話題になるのは、地球温暖化などの気候変動問題に対応するための脱炭素という動きです。最初の新聞記事は、銀行が、企業融資の審査基準に脱炭

素という要素を考慮するようになってきているが、その業務を担える知識を有している人材が不足しているという記事です。

人権でも同様の動きがあります。2021年ユニクロのシャツがアメリカの税関で輸入手続きを差し止められるという事件が起きました。中国の新疆ウイグル自治区における強制労働産品が原材料に用いられていないと十分証明されていないという理由でした。企業が、自社の製造過程だけでなく、その原材料の製造過程におけるまでの人権侵害の有無の把握をもとめられるようになってきているのです。上述二つ目の記事は三菱UFJフィナンシャル・グループが融資の審査基準に、融資先の企業だけでなくその取引先の人権順守状況まで含めるという趣旨の記事です。

なぜ企業は、一見すると自らの損になりそうなことにかかわろうとしているのでしょうか。「三方良し」の理念にあるように、人間は社会的生き物であり、純粋に利己的にふるまうのではなく、他者や社会のことを考えた振る舞いが求められます。人の見ている前でわがままな行動ばかりしていれば友人を失います。企業も同様です。ましてやこの情報化社会において大企業は、ありとあらゆる行動が社会から監視されている状況にあり、すこしでも人権や環境などの様々な社会的規範に反すると、顧客、取引先、さらには金融機関からの融資を失うことになります。

このように国際的な諸基準が企業活動に大きく影響するとなると、企業やその団体は、その諸基準が、自社(自団体)にとって有利になるように国際交渉の場にも積極的にかかわりを持つようになってきています。環境をめぐる国際会議の場には、今日、政府の代表だけでなく民間からも数多くの関係者が姿を現し、会議場における情報収集や自らの立場の説明に尽力しています。

明日の経営を考えるためにも、世界の動きに目を向けなくてははいけません。

私の教育実践： 滋賀大学での行動経済学講義経験

府内直樹 / 滋賀大学 経済学部 教授

本稿では、私の滋賀大学での教育実践、特に「行動経済学」の講義について話をします。私は2021年4月に滋賀大学に移籍しましたが、移籍後すぐに行動経済学を担当することになりました。行動経済学担当は初めてで、少し手間取りましたが、テキサスA & M大学時代の行動ゲーム理論や実験経済学の授業を参考に授業準備を行いました。特に、授業中に実験を行っていたことを思い出し、これを取り入れることにしました。

具体的には、学生にSULMS上でアンケートに回答してもらったり、対面で実際に意思決定をしてもらったりしています。今回は実際に行ったアンケートとそれに対する滋賀大学の学生の回答を見ながら、彼女/彼らがこれまで観察された実験の結果と同様の傾向を見せるかどうかを示したいと思います。特に、以下のカーネマンとトベルスキーのアジア病の問題と彼女/彼らの反応について見ていきます。まず、以下の質問に回答してもらいました。

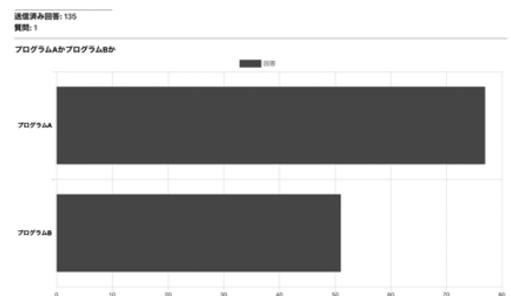
質問1：アジア病という伝染病が大流行している。この病気の死者は放置すれば600人になると予想されている。この伝染病への対策としてはプログラムAとプログラムBの2種類がある。それぞれのプログラムを採用した場合、以下の効果がある。

プログラムAを採用した場合、200人が助かる。

プログラムBを採用した場合、1/3の確率で600人が助かり、2/3の確率で1人も助からない。

あなたは、どちらのプログラムを採用すべきだと思いますか？

質問1に対する学生の回答は以下の通りでした。



次に、以下の質問に回答してもらいました。

質問2：アジア病という伝染病が大流行している。この病気の死者は放置すれば600人になると予想さ

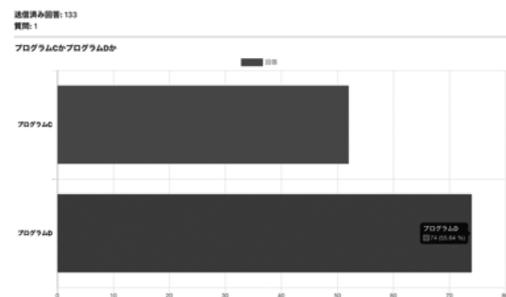
れている。この伝染病への対策としてはプログラムCとプログラムDの2種類がある。それぞれのプログラムを採用した場合、以下の効果がある。

プログラムCを採用した場合、400人が死亡する。

プログラムDを採用した場合、1/3の確率で1人も死亡しないが、2/3の確率で600人全員が死亡する。

あなたは、どちらのプログラムを採用すべきだと思いますか？

質問2に対する学生の回答は以下のようになりました。



実は、上記の二つの質問は、本質的には同じ問いになっています。質問1のプログラムAと質問2のプログラムCは「600人中200人が確実に助かって、400人が確実に死亡する」ということを意味していて、全く同じです。また、質問1のプログラムBと質問2のプログラムDは「1/3の確率で600人が助かるが、2/3の確率で全員が死亡する」という意味で同じです。しかし、異なる枠組みで質問をすると、異なる結果が得られる、フレーミング効果が滋賀大学の学生からも見られました。

この実験の他にもさまざまな実験を行い、時には教科書通りの結果が得られないこともあります。また、論文用のデータ収集が目的ではないので、ラフな形で質問や実験をしています。しかし、講義の途中でこのような実験を取り入れてリフレッシュしてもらったり、実際に自分達の反応と教科書の内容を比較しながら理解度を深めてもらったりなど、教育面では意義があるのではないかと考えています。これからも、学生の理解度や学習意欲を高めるために、授業改善や努力を行なっていく所存です。

学生時代の学びと情報管理学科について

内藤雄志 / 滋賀大学 経済学部 准教授

私が滋賀大学経済学部に着任したのは、1994年4月のことです。バブルははじけていましたが、当時の滋賀大学経済学部は、6学科を有する、国立大学の経済学部としては学科数、学生数とも国内最大規模の経済学部になっていて、私は「情報管理学科」の専門科目を主に担当する教員(当時は「教官」と呼ばれていました)として採用されました。

情報管理学科の前身は、管理科学科という学科です。企業の経営活動において、科学的な意思決定を行うことや、その為に膨大な情報を集め効率よく運用し管理するための理論と技術が重要であることは、1960年代にも既に認識されていました。管理科学科は、そのような計数的管理手法の教育研究を目的として、経済学科、経営学科に次ぐ第3番目の学科として、1972年に設置されました。そして、1990年に、電子計算機・数学・統計学を駆使して、経営情報の数理的・組織的な教育研究を行うことを目的とした情報管理学科へと改組されました。

一方、高校2年生(1982年)頃の私は、経済学部を第一志望の学部として考えていましたが、受験科目として興味があった、いわゆる「数III」を入試科目として課しているような経済系の学部をなかなか探し出すことができずにいました。また、やや優柔不断な性格の為、進学先の選択問題だけでなく、課外活動において部長として時折なんらかの決断を求められることも、しばしば悩みの種でした。いったい、何を根拠に判断したらよいのだろうか・・・。そのようなことを考える日々の中、幸いにも、「経営工学」関係の学科があることを知ることができました。当時の経営工学関係の学科は、管理科学関係の学科が企業の経営全体を対象にしていることと比べると、主に生産活動の最適化や効率化を対象としているといった相違はありましたが、経営における問題などを対象に科学的な意思決定を行うための理論や手法に関する授業(数学やコンピュータ実習など)がたくさん用意されているようなので、経営工学を学べる大学に進学することになりました。

大学で学んだ内容は、期待していた以上に興味深い物でしたが、経営学、数学、コンピュータについて三刀流でバランスよく身につけることは、4年間では

困難だと感じるようになりました。そして、経営関係の授業を担当されていた先生から「若い内は数学を優先して深く学んで、それから実際の業務を通じて経営学などの分野も学ぶのもよいのではないか。」といった助言をいただいたことがきっかけで、3年次からは数学関係の科目を中心に履修をして虻蜂取らずになるのを避けようとはしましたが、結局大学院に進学する、しかも6年間も在籍する道を選びました。

大学院の6年目、私が主に学んできた「オペレーションズ・リサーチ(OR)」の授業を担当するような公募は当初ほとんど見つからなかったのですが、滋賀大学経済学部情報管理学科の公募が学会誌に掲載され、申し込んだ結果、1994年4月に着任できることになりました。同時期に滋賀大学経済学部採用された教員数は4月だけで9名という、今から考えると恵まれた時代であったこと、学科増設に伴い、情報管理学科でOR関係の専門科目を担当できる教員が手薄になったことが、幸いしたのです。

情報管理学科では、コンピュータによる情報処理技術や数学的なデータ解析・最適化の方法を習得し、それらを基礎として、財務、生産、流通などのシステムや、これらを総合した経営情報システムに関する問題を学んでいく、そういうことを意図したカリキュラムを提供してきました。経営学、数学、情報科学をバランスよく学んでいただく為に、自学科の専門科目について必修12単位を含む30単位以上を要件とした時期もありましたし、その要件を緩くする代わりに入試科目として数学をどこまで課すか試行錯誤した時期もありました。私自身は経営の問題などをどうモデル化し、科学的な意思決定を行えるのか、授業を通じて伝えられるように心がけてきました。

データサイエンス学部の誕生に伴い、情報管理学科は発展的解消となりましたが、これからも彦根キャンパスの両学部において、現実の複雑な問題に対するデータの科学やモデルの科学に関する多くの授業が開講され、それらを学んだ卒業生が巣立っていくことでしょう。私自身は三刀流を未だ達成できていませんが、実社会において科学的な意思決定を行える、そのような人材を育成できることに両学部が寄与できることを願っています。

廃墟のユートピア

井手一郎 / 滋賀大学 経済学部 准教授

滋賀大学経済学部には、経済、ファイナンス、企業経営、会計情報、情報管理、社会システムの6学科が存在した時期があった。2023年度からは、総合経済の1学科になっている。なぜ、総合なのか。優れた統率者は、幅広い視野で問題状況を理解し、何が重要かの判断を誤らず、その価値判断を含む自分の考えを公衆に向けてわかりやすく語ることができる。この条件に向き合うことが総合性の召喚に至る道の一つであろう。6学科に代表される専門性を円周上に等間隔で配置された6点で表すと、その各点は、例えば、6学科の名称を継承する専門研究センターとして具体化できそうだが、円の中央部分ではそれらの点を結ぶ様々な曲線が交錯し、それが総合性の教育のための機能的プラットフォームの出現を表象する。それは広義の教養教育にかかわるが、基礎としては、学部生が4年間を通じて大学数学の授業を継続受講できること、例えば、近現代史に関する論争的な質問に500字程度の日本語で回答するという作文の稽古、その問答を明晰な英語で表現する演習などが考えられる。

彦根キャンパスには、陵水会館や、近年、創建時の景観を回復した講堂など、印象に残る建物がある。しかし、これらの意匠は滋賀大学が創り出したものではない。思い返すと、かつて、経済学部図書館の前に、三辺が通路に面した、風通しの良い四角形の、芝の中庭があって、隣接する旧書庫の白い壁が、明るい空気感を醸成していた。ベンチがあり、彦根城を遠望できた。私はこの中庭を、戦後、滋賀大学が手に入れた最上の空間の一つであると考えていた。細部を作り込み、さらに良いものにできたであろう。この空間は3階建ての研究棟の新築とともに失われた。さて、大学において中庭とは何だろうか。学問には閑暇が不可欠と言われるが、中庭はその思想の空間的表現である。人が出会い、気軽に挨拶して、立ち話ができる、何も無い空間が、大学にとっては貴重である。しかし、一部の人には中庭は単なる空き地であるようだ。「弁当持たせりゃ食いたがる」云々という戯れ歌がある。珍しく予算がつけば気持ちも昂るだろうが、大学人が「空き地見つけりゃ建てたがる」ではね。この姿勢は大学が満腔の侮蔑とともに峻拒すべ

き仮想敵の振る舞いに似ている。今は自ら長所を潰し可能性を扼殺しているようにしか見えないが、将来の覚醒はあるのだろうか。

大学は教育研究を通じて地域に向けた一種の公共政策を実行できる。例えば、住民との教育研究プロジェクトの中に「映像的教養のための教育プログラムの開発と試行」を掲げておけば、彦根で学術的な、あるいは、尖がった映画の上映運動をいずれは商業ベースで継続することを望む人々の出発を助けるだろう。自転車、人力機械、釣り、発酵食品、栽培、絵本、印刷術・製本術などについても、大学の関与から、新たな地域文化の生成や高い質の追求に繋げる余地がある。また、電子空間に編成された同窓会を通して、大学は会員に生涯にわたる多様な学習機会を提供できる。特に、女性会員の存在を明確にするためにも、例えば、出産育児の後で、キャリアの再起動を望む人を念頭に、その準備に関連する講義を提供することが考えられる。卒業生による世界ネットワークの充実が成り、その課報・人間探索能力を信頼できるようになれば、例えば、その上で実質的に機能する、全球的な戦略的入試制度を構想できる。

大学に入学した頃、私は同世代の友人たちと、自分たちの世代が死滅するまでに、浦潮から大連まで、陸路を自由に移動できる世界が実現しているのを見たいものだ、と話したのを覚えている。それから40年以上が経過したが、状況はほとんど変わっていない。この停滞は異常である。機能する民主国家は稀であるから、日本の制度の良い部分を洗練し、一つの典型と言えるところまで彫琢することが、世界の厚生改善に向けた日本独自の貢献になると言えそうだが、異常な停滞を前にすると、次のように問わずにはいられない。私たちは、独裁国家群の中で順応を仮装しながら、変革の機会を模索している人たちのために、何ができるだろうか。

時代の変化と試行錯誤の教育

菊池健太郎 / 滋賀大学 経済学部 准教授

滋賀大学経済学部は創立100年をむかえました。多くの学生が彦根キャンパスで学び、巣立っていった歴史の重みに敬意を表します。私自身は経済学部で2014年4月に着任し、今に至ります。年数だけでいえば、私は滋賀大学経済学部の歴史の約1割に関わり、教育・研究に携わってきたこととなります。以下では、この10年間で抱えてきた教育に対する思いを記したいと思います。

教育は試行錯誤の連続であることを実感しています。私が担当する授業では、時折金融システムに関する話題に触れます。金融システムは、新たな金融技術であるフィンテックの出現を背景に変化を加速させています。最新の金融実務の事情をキャッチアップし、授業の中で解説する難しさを痛感しています。私と学生の「常識」が一致しないことも増えてきました。例えば、2008年に起こった世界的な金融危機は、私にとっては「金融史における重大な出来事」として位置付けられますが、そのことを前提に受講生に話をしてしまった経験があります。私が10年前に滋賀大学で教え始めた頃の学生であれば、「リーマン・ショック」という言葉は中学校や高校の時には既に耳にしていたかもしれません。しかし、2023年に私の講義を受ける学生にとっては初めて聞く言葉かもしれません。教員としての経験の積み重ねは、受講生との年齢差が広がっていることも意味します。それに伴い、私が思い込んでいる前提が受講生に理解されにくくなっている可能性は否めません。そのことを強く自覚し、授業でより丁寧な説明を心がけたいと考えています。

私は、教育において時代の変化を意識し、過去10年間で専門科目やゼミの内容を変えてきました。例えば、ゼミでは、滋賀大学に着任した当初の数年間には金融派生商品や資本資産評価理論などのファイナンス理論を題材にした演習を行っていました。しかし、ここ数年は、学生がデータ分析を実践する力を養う機会とし、確率・統計やプログラミングの基礎を学び、様々な統計解析手法を習得する場を提供しています。この取り組みは、従来の基礎から専門性を築き上げていく方法論ではなく、「習うより慣れる」に重点を置いたものと言えます。学生たちが実

際に手を動かし、コンピュータ上でプログラムを実行し、分析結果が出力される過程に興味を持ち、学習意欲を高めている姿を目にすると、この取り組みが一定の成果を上げていると感じます。ただし、本当のところは、専門性を醸成するための基礎力強化の機会を軽視したくはありませんし、理論解説の時間も多く持ちたいと思っています。現状、バランスの取れた教育の実現に向けて腐心しているところです。

上述のように、教育には困難な側面もありますが、新たな気づきに遭遇し喜びを感じる瞬間もあります。例えば、授業の中でシャドープランクやフィンテックについて解説する機会があり、そのために中国を代表するフィンテック企業の経営について調査しました。すると、彼らが決済業務から融資業務に業務の軸足を移してきていることを知りました。この動きは、江戸時代における両替商が決済業務から融資業務に進出していった歴史と重なる部分があり、興味深く感じると同時に、このような気づきを得ることができたことに喜びを覚えました。また、急速に変化する時代の中にあっても、新しいものに心を開きつつも、過去の知識を大切にすることの重要性に気づかされる機会にもなりました。

新入生が受講する「大学入門セミナー」をこの春学期に担当しました。授業の中で、「春学期に履修している科目の中から好きな科目（もしくは好きになりたい科目）を3つの理由とともに挙げてください」という課題を出しました。学生たちは理由を添えて好きな科目や好きになりたい科目を記述してくれました。彼らの回答を通じて、学生たちの多様な興味や関心に触れ、大いに刺激を受けたところです。彼らの学びたい分野に対する情熱や将来へのビジョンを受け止め、教育への試行錯誤をこれからも続けたいと思います。

経済学部における今後の スポーツ科学教育について

小倉圭 / 滋賀大学 経済学部 講師

「これまでの経済学部・これからの経済学部」という特集テーマでエッセイ執筆の依頼を受けました。100年という長い歴史を持つ滋賀大学経済学部を振り返ることは、私のような他分野の若手教員には到底できませんので、現在および今後のスポーツ科学教育について私なりの考えを書かせていただきます。

1. 滋賀大学のスポーツ科学教育

私は2017年度にスポーツ科学分野の教員として本学に着任しました。その際、滋賀大学経済学部が体育科目を必修科目として重要なものと位置付けていることや、学生の将来を見据えながら一人ひとりと丁寧に向き合うスポーツ科学の授業理念に感銘を受けたことを覚えています。それだけでなく、スポーツ系の学部を持たない大学であるにもかかわらず、学生の運動部活動に対する熱量が非常に高いことにも驚かされました。これも、100年という長い歴史の中で、これまで体育・スポーツ科学教育や課外活動に携わってこられた先生方、卒業生の皆様のご尽力によるものだと実感しています。

現在のスポーツ科学分野における活動は、正課授業、課外活動教育、社会連携・社会貢献など多岐にわたります。正課授業では、学生が大学4年間、さらには卒業後の長い将来を幸せに過ごすため、健康教育を軸としながらも、主体的に考え他者と協同することで育まれるライフスキルの獲得や、スポーツそのものの価値を考察し、それを生涯にわたって享受する力を養うことを目指しています。また、教員がそれぞれ専門種目の部活動を日常的に指導しながらも、運動部活動全体に対する教育も日々協力・連携しながら行っています。さらには、各企業との連携のほか、スポーツ教室をはじめとする社会貢献事業を継続的に行うなど、スポーツ(スポーツ科学)の価値を広く社会に伝えていく活動も行っています。これらは一見別々の活動のようですが、スポーツの意義や教育的観点から考えると不可分なものです。それほど、スポーツが提供できる価値は多様であるともいえるでしょう。

2. 今後のスポーツ科学教育の展望

近年、どの分野においてもデータサイエンスの重要性が高まっています。本学の経済学部も、経済や経営などの専門分野に加えて、データサイエンスにも通じた人材を養成する領域横断型のデータサイエンスコースを新たに開設しています。スポーツ界も例外ではなく、スポーツアナリティクス、すなわちスポーツを「分析する」ことの価値が急速に高まっています。本学のスポーツ科学教育においても、従来の授業理念を基盤としながらも、スポーツにおける様々なデータを分析し、活用するといった新たな価値を提供できるのではないかと考えています。すでに、現在のスポーツ科学や身体運動の科学の授業においても、情報機器や分析機器などを活用しながら授業を展開しており、コロナ禍による授業のオンライン化にも対応しながら、変化する社会に応じて授業を常にアップデートしています。

先にも述べましたが、スポーツを学ぶための切り口や、スポーツが提供できる価値は無限にあります。スポーツは「サイエンス」の側面もあれば、「アート」の側面もあります。また、「理論」と「実践」、「分析」と「総合」など、これらの両面からのアプローチが必要な奥深いものです。スポーツは人間が行うものである以上、スポーツを学ぶことは人間を学ぶことにつながります。そして、人間を学ぶことは、経済学の目指すところでもある「人々の幸せ」につながると思います。

最後は蛇足でしたが、今後社会がどのように変化しようとも、スポーツが提供できる価値は尽きることはないと思います。滋賀大学経済学部としても、これまでの100年がそうであったように、スポーツ科学教育がこれからの100年も学生の様々な学びに貢献できる重要な学問として在り続けられると確信していますし、その一助となれるよう努めていきたいと思えます。

バートシェーナ

茶色く変色した資料の保存の取り組み

江竜美子 / 滋賀大学 経済学部 助手

滋賀大学経済経営研究所において、彦根高等商業学校が収集した資料の再整理を30数年にわたり担当していました。資料は、総合研究棟〈士魂商才館〉1階の書架と2階の書庫に保管しています。

1階の書架に保管する「刊行物」は、現代の私たちにとってたいへん趣き深い資料です。資料に趣きがあるかどうかは適切な表現ではないかもしれませんが。集密書架を手動で開いていくと、長年の酸化によって茶色く変色した冊子の壁がゆっくりと広がります。何か焼けたような茶色をしています。古いのだけれど、古文書とも違う、不思議な様相の資料群です。

彦根高等商業学校があった頃は、いま(2023年)から80~100年前です。それ以前から、日本はアジアのなかで「帝国」日本をかかげ、教育と研究に邁進していました。したがって、収集資料は当然それを反映した内容となりました。当時日本が統治していた地域(台湾、朝鮮半島、中国東北部、南洋諸島など)の資料が、日本の一地域として、同じように収集されました。

書架のなかで『神戸商工情勢』の前後に『大連商工会議所統計年報』『釜山商工業案内』や『樺太商工名録』が、これらの並びは、彦根高等学校収集資料の特徴の1つでもあると思います。

茶色く変色した資料の取り組みを私が始めたのは、2000年頃でした。その頃、彦根高等商業学校が収集した資料群は、変色のみならず、ページをめくるとパラパラとリーフパイのように紙のかけらが落ちました。インクの退色により、請求ラベルの文字は消え、資料の出納も困難な状況になっていました。

1990年代は、戦後半世紀を迎え、アジア・太平洋戦争の検証が進んでいました。学外から研究者が閲覧に来られ、一度に20冊~50冊程度の閲覧冊数は珍しくはありませんでした。文献複写の依頼も次々とあり、これら劣化資料の利用について、他の大学ではどのように対応しているのだろうか?と常々疑問に思っていました。

そのようななかで、2001年から2012年まで「旧植民地関係資料をめぐるワークショップ」として、全国の研究機関で同じような悩みを持つ実務者と、それらの資料を利用する研究者の集まりを、年に1度開

催することとなってゆき、事務局を務めました。

10年の間、全国の大学の資料部門の実務者や保存担当者から、有効な方法を教えて頂きました。その短い10年のうちでも、いろいろな科学技術が安価で使えるようになり資料保存で応用され、活用され始め、それらが一般化されるうちに、また別の新しい技術が推奨されるといったことがありました。資料のマイクロフィルム化、脱酸処理など。デジタル化は、初期はJPEGでした。現在のPDFも、これが100年後に閲覧できる保証はないでしょう。

彦根高等商業学校が終焉を迎える1940年代から滋賀大学の発足当初の1950年くらいは、洋紙を十分に作れなかったせいか、重要な資料も酸性紙(新聞や電話帳のような紙)で作られています。当時、何百、何千と印刷された冊子は、その多くが劣化のため廃棄され、今となっては滋賀大学に1冊しかないものもあります。和紙に墨で書かれた古文書と同じ価値の資料が、滋賀大学にはあります。

目録を作って、デジタル化するといった繰り返しのなかで、各大学の附属図書館が検索システムOPACを充実させ、研究成果は機関リポジトリで読むことができるようになり、経済経営研究所の資料部門も一定の役割を終えたこととなります。経済経営研究所は、独自の検索システムを持っていますので、こちらはたんなる検索というより、これからはデジタルアーカイブズとして機能できるとよいと思っています。酸化し茶色く変色し劣化した資料は、デジタルアーカイブズにしていくのがよいでしょう。

しかしながら堅牢な検索システムの保持は、国内外のコンピュータウイルスに備えるため莫大な保守費用が掛かることがわかってきました。収集された資料は、冊数自体はたくさんある訳ではありません。ですから、不要として処分しても、たくさんの書架スペースが空くことはないでしょう。収集資料は目録があり、いつでも取り出せる状態にしています。とりあえずは、そのまま現物を書架に残して、次の時代まで置いておくのも1つの方法かと思います。

次の時代とは、この文章を読んで頂いているみなさんが居ない次の時代です。思ってもみない新しい保存方法がきっと考えだされていることでしょう。そのときが来るまで現物を保管しておくというのも、デジタル化とは別の一つのよい方法と考えます。

これからの滋賀大学経済学部

わくわくする経済学部へ

入江直樹 / 滋賀大学 教育・学生支援機構 特命教授

卒業して32年が経った2016年に就職担当の特任教員として再びこの彦根に戻ってきた。街の風景や大学校舎には当時の面影もあったが体育館やグラウンドは様変わりしていた。自転車で30分かけて通った八坂グラウンドは滋賀県立大学となっていた。体育館は大学構内にあり、旧体育館跡地にはテニスコートがある。ただこの彦根の空気感と市民の方々の温かさは変わらない。私が家庭教師をしていた北野神社のご長男は立派な神主、アルバイトをしていた鳥源の子供たちは「すぎもと」「サンバーガー」の経営者となっている。昔同様にふらりと訪ねて顔を見て少し話して帰ってくる、そんな毎日を送っている。何年たってもこの彦根と滋賀大学は私にとっては安心できる安全な場所である。組織としての経済学部は大きく変化してきた。卒業した昭和59年は経済学科、経営学科、会計学科、管理科学科の4学科、卒業時の学生数は312名であった。今は経済学科、ファイナンス学科、企業経営学科、会計情報学科、社会システム学科の5学科となっている。そして今年からは総合経済学科のみとなり、3年次に希望する専門領域を選択するようになった。また入学方法も当時は共通一次試験を受けて、その後の二次試験で入学する方法であった（一部二次募集で入学した者もいた）。今は大学入学共通テスト後の前期日程、後期日程からなる一般選抜に加えて学校推薦型選抜、総合型選抜と入学方法も増えた。男女比も当時と比較して女子学生が大幅に増えている。このように枠組みが大きく変わっても変わらないのは目指すべき方向と志である。「国際的な視野をもち、環境に配慮しつつ地域社会にも貢献できる、個性ある専門職業人の養成」という学部理念に基づき教職員と学生が奮闘していることを肌で感じている毎日である。

今後、滋賀大学経済学部の果たすべき役割は、学問を究めること、人を育てること、そして文化を育むこと、この三つであると考え。

学問の探求は大学にとって最も重要で、今はその成果が大学の成果とも言われている。一人一人の教員から湧き出てくる成果、業績を最大限にするために職員も徹底的にこれを支援する、このつながり、団結が組織成果を最大限なものにする。教員自らが

常に自らの課題に向き合い思考し、その成果を伝える、知らしめる、この繰り返しが経済学部のステータスをこれまで以上のものにしてけると確信している。以前、前職で関わりのあった大学医学部教授から「私のサイエンスに力を貸してくれ」と言われたことがある。徹底的に突き進む、これこそが大学に籍を置き研究業務に努める者のあるべき姿なのではないかと思う。

大学教員は講義や演習で学生と直接関わることを常としている。講義においてはこれまでの義務教育や高校教育と違い、学生の学びたいという姿勢、意欲がなくてはならない。講義に出席するしないが学生の意志に依る。ただ今の学生は周囲から十分すぎるほどの環境を用意され、してもらうことが当たり前となっているが大学はそうではない。この教員は何を伝えたいのか、何を教えようとしているのか、を考え抜いて毎日の講義に出席する必要がある。そこを怠ると面白くない時間を過ごすことになる。ただ少しだけ教員が学生に歩み寄ると学生との距離は一気に近いものとなるが、この程度は難しい。演習において学生は教員の言葉、考え方をコピーしているようにも思える。これは就職相談に来た学生と話していても実感することである。教員の行動、振舞い、言葉は想像以上に学生に影響を与えている。これが教員としてのやりがいの一つかもしれない。

このような教員、職員、学生の行動、思考は100年の有史の中で育まれたもので、ここから多くの人材と多くの成果が生み出されてきた。この枠組みが我々にとって大きな財産になっていると思う。外部環境が大きく変わり、その変化の速さも日増しに早くなり、昨日の新しい知見・情報が今日には既知で古の話となってしまつ中で我々がいかにブレることなく日々の研究、教育に邁進していくか、これが重要なのではないだろうか。世の中で人々が暮らしている上で経済学は不可欠な学問で、それをこの彦根で究め伝えていく、この原点を常に意識しながら毎日を学生と共に過ごす、これこそがこれからの滋賀大学経済学部のあるべき姿なのでは思う。

滋賀大学がこの彦根の地にあることで

柴田雅美 / 滋賀大学 産学公連携推進機構・地域連携教育推進センター 特命教授

本学経済学部が100周年を迎えた。城の中にある大学は、立地的にも珍しく、大学構内からお堀越しに彦根城の天守閣や三重櫓の勇姿が見える。桜の季節には絶好のロケーションになることに、現役大学生はなかなか気がつかないらしい。

これからの100年を考えてみた。西暦はなんと2123年。今、この記念誌を読む人たちは恐らく誰も生きていないだろうし、今年生まれた子どもたちももしかしたら半数ぐらいは生きていないのではないかというような時間の経過だ。大学の建物自体は残っているだろう。彦根城も残っているだろう。大学のある彦根のまちはどうなっているだろうか。その時、ここで学ぶ学生たちは、一体どんなふうになっているだろうか。

私は高校まで彦根で過ごし、その後社会人経験をへて彦根に帰ってきている。大学の隣の彦根市立西中学校と滋賀県立彦根東高等学校が母校である。中学生と高校生時代に滋賀大学の門前を通っていたし、街中では、大学生がジャージ姿に50ccバイクにまたがる姿や角帽に長い学ラン姿で堀端を歩く姿も見ていた。大学構内に入ることはなかったが、身近な大学生の姿から大学の世界を想像していたことを思い出す。

社会人として彦根の経済団体で働くようになり、当時の社会連携センターと共催で講座をしたり、彦根の企業と大学生をつなげるインターンシップで、たびたび大学を訪れるようになった。当時、その経済団体では、滋賀大学との産学連携を強めていこうという時期で、どうすれば互いのニーズが充足されるのかに腐心した。それでもまだ大学は地元企業にとっても、働き暮らす人々にとっても、敷居の高い場所であった。

その後、私は2011年から滋賀大学で働くようになり、12年目を迎えている。地域連携教育推進センターで、地域の企業や行政、NPOと連携した授業プログラムを実施するのが大きな役割である。延べ150ほどの授業プログラムを実施してきたが、彦根のみなさんにとって、滋賀大学は少しは身近なものになったのだろうか。

ところで、地域と大学が身近になることで一体何が生まれるのだろうか。学生には、地域課題やテーマ

に取り組む学習や地域活動・ボランティア活動を通じて大学で学んだ理論を実践的に活用したり、現実の課題に立ち向かう経験をすることでリーダーシップや問題解決能力を磨いたり、生き方・暮らし方を問う人間力を養う機会になっているだろう。

地域にとってはどうだろうか。数年前、彦根は雪害と言われるほどの大雪に見舞われた。大学生が多く暮らす地域は、彦根城下の昔ながらの細い路地沿いに多くの民家が隣接していて、高齢者さんの住まいが多い。高齢者さんは、除雪車も通れない路地や家の前の積雪で、家の外に出られないという事態にもなった。そんな時に大学生の出番がきたのだ。クラブ単位でも個人でも除雪をしにまちへ出た学生は多かったという。

これは1つのエピソードだが、大学生が地域に暮らすことの意味の一つだ。この100年もの間、地域のSOSに応える学生、地域のボランティアに参加する学生、彦根のあちこちの店頭立つ学生が居続けてきたはずだ。集まり、散じて、人は変わっていくけれど、彦根のまちの大学生の姿は、このまちの普通の風景に違いない。たとえ日常的には深い交流がなかったとしても、時に横並びで走る自転車の学生の姿に苦言が呈されることがあったとしても、まちに学生の姿がなかったとしたら、そもそも大学が彦根になければ、どんなまちになっていたのだろう。

彦根というまちに、そこにある滋賀大学に、私は期待している。これまでも、これからも、大学生という若者が、このまちで働き暮らす人から多くのことを学び、幸せな人生とは何かを考え、自分なりの仮説を持って世界中に出ていってくれることを。そして、大学は、開かれた学問の府であると同時に、地域に必要とされ、地域を形づくる大きな存在であり続けることを。大学のあるこのまちは、ここに学び、暮らし、働く大学生にいつまでも寛大であってほしい、大学生をこの彦根のまちの一部にし続けてほしいと願う。そして、私自身は今後も学生が気づかないだろうお堀越しの桜を、もしかしたら次の100年間見続けているのではと淡い期待をしているのだ。

